

200201267A

平成 14 年度厚生科学研究費補助金
(医療技術評価総合研究事業)

在宅ターミナル患者の経時的ニーズの変化に対する
ケアプログラムの開発と評価方法

平成 14 年度報告書

主任研究者 島内 節
(東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科)

研究者名

主任研究者 島内 節 (東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 教授)

分担研究者 友安直子 (東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 助教授)

田中 博 (東京医科歯科大学 難治疾患研究所 教授)

田近栄治 (一橋大学大学院経済学研究科 教授)

油井雄二 (成城大学経済学部 教授)

季羽倭文子 (ホスピスケア研究会 代表)

研究メンバー

- 1 島内 節 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 教授
- 2 色部 恭子 さいわい訪問看護ステーション 看護師
- 3 笠原 ケサエ (社)東京都看護協会 千駄木訪問看護ステーション 管理者
- 4 季羽 倭文子 ホスピスケア研究会 顧問
- 5 篠田 道子 Office Shinoda 責任者
- 6 田近 栄治 一橋大学大学院 経済学研究科 教授
- 7 田中 博 東京医科歯科大学 難治疾患研究所 教授
- 8 辻 彼南雄 ライフケアシステム 医師
- 9 友安 直子 東京医科歯科大学大学院 保健衛生学研究科 助教授
- 10 矢口 美恵子 (社)茨城県看護協会 土浦訪問看護ステーション 管理者
- 11 油井 雄二 成城大学 経済学部 教授
- 12 和田 洋子 (医)社団三喜会 鶴巻訪問看護ステーション 管理者

研究協力者

- 1 小倉三代子 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 大学院生
- 2 大木 正隆 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 大学院生
- 3 奥富 幸至 東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 大学院生

目 次

はじめに	1
1 研究目的	1
2 研究方法	1
3 研究結果	3
1) 文献研究	
(1) ターミナルケアの動向	3
(2) がんターミナル研究	6
(3) 在宅ターミナル研究	19
(4) 海外文献	28
(5) 文献から得られたプログラム作成上の留意点	31
2) 先行研究を参考にしたケアプログラムの枠組み案作成	32
3) 事例分析	39
4 まとめ	43
海外調査用資料	45

はじめに

平成9年度版厚生白書によれば、8年現在において高齢者の約9割が自宅を死亡場所として希望しているにもかかわらず、実際に自宅で死亡した者の割合は3割強にすぎない。在宅死を難しくしている要因はいくつか考えられるが、そのうちのひとつとして安らかな死という営みを遂行させるにたる在宅ケアの包括的プログラムがないことがあげられる。

日本では通常1-6ヶ月とされるターミナル期における支援の中心は看護である。しかし、専門職として倫理的に死にどのようにかかわっていくべきかのガイドラインがようやく注目され始めた段階であり、どのような視点から、どのような具体的技術を用いて患者と家族を支援していけば精神的・身体的に安定した状態で満足度の高いゴールを迎えられるかの手引きとなるケアプログラムはまだ開発されていない。標準的なケアプログラムとガイドラインを作成し、実用化するとともに、プログラムの成果をあきらかにしたい。

高齢社会となり、家族のあり方も大きく変わりつつあるわが国において、どのようにターミナル期を過ごし、生を全うするかは大きな社会問題でもある。生と死の問題に早くから取り組んできた欧米カナダの研究や実践を参考にするとともに、日本で作成するケアプログラムの有効性を緒外国でも検証する。

1. 研究目的

1) 在宅死を可能にするために、ターミナル期にあるがん患者と徐々に衰退する高齢者の経時別ニーズに対して必要な看護機能を中心としたケアと支援体制の特徴を分析し、プログラムモデルを開発し、これを個々の事例に適用して仮説検証的に実用化する。

日本・カナダ・イギリス・フィンランド・スウェーデンにおいておこなう。

2) プログラムの成果をQOL, 在宅における死亡率、経済性、等の視点から明らかにする。

日本・カナダ・イギリス・フィンランド・スウェーデンにおいておこなう。

2. 研究方法

1) 文献研究

2) 先行研究を参考にしたケアプログラムの枠組み案作成

3) 事例研究にもとづく枠組み修正：枠組みの適切さを検証するために事例の取り組み過程と、取り組み視点を枠組みに当てはめてみる。

4) アンケート調査による枠組みの妥当性検証

5) 事例研究にもとづく標準的ケア内容作成：ケアプログラムの具体的内容を明

らかにするために事例から実施されているケア内容をひきだし、標準化する。

6) ケアプログラムの作成。

7) 作製したケアプログラムの有効性の検討。各国で実際にプログラムどおりにケアを実施し、その効果をいくつかの指標を用いて評価する。

有効性を測る指標案：① 患者・家族の QOL

② 在宅での死亡率（死亡者数/在宅死希望者数）

③ 在宅死の経済的効果（在宅ケア利用者負担額平均/
病院ケア利用者負担額平均）

8) 以上の研究結果を集約し、ケアプログラムの使用方法、ケアプログラム実施段階における目標の達成度から見た評価の仕方、ケアプログラム全体の成果を見る評価の仕方をガイドラインとしてまとめ、実用化を測る。

平成 14 年度は 1, 2, 3 について実施したので以下に結果を述べる。4 については現在進行中である。

3. 結果

1) 文献研究

(1)ターミナルケアの動向 ～用語の定義、文献検索～

死を目前にした人に対して、治療ではなくケアを中心としたかかわりということで「ターミナルケア」や「ホスピスケア」「緩和ケア」という言葉がよく使われるようになってきている。

ターミナルケアは1960年代の半ば、イギリスの Cicely Saunders 女医が St Joseph's および St Christopher's hospice で行った活動¹⁾ をきっかけに徐々に世界に広まっていった。1975年に Balfour 英国首相が“palliative care”という言葉を使ったことにより、イギリス、フランス、そしてカナダにまでその言葉が広まり、今では国際的にも使われるようになってきている。²⁾

“terminal care” “hospice care” “palliative care”それぞれの用語を、英英辞書「On - line Medical Dictionary(Published at the Dept. of Medical Oncology)」で見ると以下のように定義されている。

terminal care : Medical and nursing care of patients in the terminal stage of an illness.

hospice care : Specialised health care, supportive in nature, provided to a dying person. A holistic approach is often taken, providing the patient and his or her family with legal, financial, emotional, or spiritual counseling in addition to meeting the patient's immediate physical need. Care may be provided in the home, in the hospital, in specialized facilities(hospices), or in specially designated areas of long-term care facilities. The concept also includes bereavement care for the family.

palliative care : Treatment aimed at relieving symptoms and pain rather than effecting a cure.

また、The World Health Organisation (WHO)では palliative care を以下のように定義している。

“Palliative care is the active total care of patients whose disease is not responsive to curative treatment. Control of pain, of other symptoms and of psychological, social and spiritual problems is paramount. The goal of palliative care is achievement of the best possible quality of life for patients and their families.”³⁾

在宅におけるターミナルケアを考える場合に、これらの用語が研究論文ではどのように使われているのかをみるために MEDLINE を用いて最新 5 年分（1988 年～2002 年）を検索した結果が表 1 である。

表 1 MEDLINE による検索結果（1998 年～2002 年の 5 年分）

キーワード	# 1	# 2 (# 1 and <u>nursing</u>)	# 3 (# 2 and <u>home</u>)	# 4 (# 3 and <u>cancer</u>)	# 5 (# 3 and <u>elderly</u>)	# 6 (# 3 and <u>family</u>)
Terminal care	3244 件	322	118	35	9	39
Hospice care	832	83	31	8	4	7
Palliative care	5913	254	65	26	7	18

全体としては、palliative care が一番多く使われているが、看護に限定すると terminal care のほうが多い。また在宅を home というキーワードで絞り込んでいるが、検索結果ではナーシングホームで行われた研究なども多く、本当に在宅で行われている内容は # 3 の数よりも少ない。また医学中央雑誌にて日本の文献を「ターミナルケア」「在宅」のキーワードで検索したところ、原著で発表されているものは最新 5 年間で 20 件のみであった。これらのことから在宅でのターミナルケア、緩和ケアはまだ研究的に十分には行われていないといえるであろう。

一方、カナダでは hospice と palliative という用語を一緒にして “hospice palliative care” という言葉を作った。定義を簡単に述べると以下のとおりである。

hospice palliative care : Care that aims to relieve suffering and improve the quality of living and dying.

カナダでは上記のようなことを目的としたケアを述べるときに、“hospice palliative care” という用語を使うとしているが、個々の組織・機関では、いまだに “hospice care” “palliative care” あるいはこれらに類似した用語が継続して使われているのが現状のようである。²⁾

<引用・参考文献>

- 1) Saunders C., A personal therapeutic journey, BMJ 313(7072):1599-1601, 1996.
- 2) Frank D. Ferris, Heather M. Balfour, A Model to Guide Hospice Palliative Care: Based on National Principles and Norms of Practice, Canadian Hospice Palliative Care Association(CHPCA), p17, 2002.
- 3) World Health Organisation. Cancer pain relief. Geneva:WHO, 1996.

(2) がんターミナル研究

地域医療の中で行っている「がん相談」の実際

Author

赤荻栄一(古河市福祉の森診療所)

Source

プライマリ・ケア(0914-8426)25巻2号 Page141-145(2002.06)

論文種類

原著論文/特集

シソーラス用語

癌看護; 在宅介護; 地域医療; ターミナルケア; 紹介と相談

医中誌フリーキーワード

癌患者; 在宅死

チェックタグ

ヒト/特集

Abstract

5年間の癌相談件数は127件で、相談方法別には、面接相談70件、電話相談42件電子メール15件であり、家族による相談70件、本人及び本人と家族が57件であった。相談内容は、癌診断や病状に関するもの46件、ターミナルケアに関するもの36件であった。在宅ターミナルケアを希望しての相談は30件で、在宅ケアを行ったのは10件、そのうち8件が希望通り在宅死を迎えた。面接相談に来る患者は近隣地域が多く、容易に在宅医療につなぐことができる

2002226816

ターミナル期の在宅がん患者・家族の一般病棟入院時における看護婦への評価 二事例の分析から

Author

鎌田美千代(神奈川県立看護教育大学校 看護教育)

Source

神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録(1341-8661)27号
Page397-404(2001.03)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

癌看護; 看護師; 患者; 医療従事者-家族関係; 入院; 病室; ターミナルケア; 臨床看護研究; 看護評価

医中誌フリーキーワード

癌患者

チェックタグ

ヒト/老年者(65~)/女

Abstract

今後の看護課題を検討する為に、終末期癌患者・家族を対象とし一般病棟にどのような不満・希望を持っているかを面接調査により明らかにした。その結果、1)患者・家族は患者の病状・予後に対する不確実さに不安を感じ、病状・予後の情報提供を求めている。2)患者・家族は看護婦の事務的・機械的な対応に孤独感を感じ、患者自身や家族にとってはかけがえない存在に揺らぎを感じていた。3)患者・家族は退院後の生活に関する情報提供を希望していた。4)より良いケアする為に、看護婦自身の感情を支えてもらう必要があった。5)一般病棟の看護婦は患者・家族の退院後の生活に目を向け活用できる社会資源について提供できるよう、学際的チームとの連携が必要であると思われた

2002203564

在宅がん緩和療法中に家族が行った意味療法

Author

境健爾(済生会熊本病院)

Source

臨床看護(0386-7722)28巻2号 Page280-282(2002.02)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

胃腫瘍(悪性,精神療法);緩和ケア;在宅介護;精神療法;ターミナルケア;往診;
末期患者;在宅医療

チェックタグ

ヒト

2002183946

脳腫瘍末期患者の家族との関わりについて 実践的指導により家族の介護意欲が向上し一時帰宅できた例

Author

小谷純子(奈良県立三室病院)

Source

奈良県立三室病院看護学雑誌(0916-4359)17巻 Page109-111(2001.12)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

意欲； 介護者； 在宅介護； 脳腫瘍(悪性, 看護)； ターミナルケア； 末期患者； 家族看護

チェックタグ

ヒト/中年(45~64)/女

Abstract

患者は 61 歳女. 当所夫の面会は殆ど無かった. 看護婦が夫に直接コンタクトをとり指導やケアに参加するよう働きかけたことによって夫は患者の現状を把握し介護の重要性を理解することができた. 更にケアを夫中心に移行させることで, 夫が自分の生活の中に介護を取り入れるようになった

2002173720

病院から在宅への環境移行に伴うケア・ニーズの実態調査とその分析

Author

鮫島輝美(兵庫県立看護大学 基礎看護), 杉本初枝, 藤井裕子, 奥野宗子

Source

兵庫県立看護大学紀要(1340-4814)9 巻 Page87-102(2002. 03)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

環境； 看護研究； 在宅介護； ターミナルケア； 家族関係； 病院基盤在宅介護支援サービス； 在宅患者； 保健医療サービスの必要と要求； 在宅医療

医中誌フリーキーワード

実態調査； 半構成的面接

チェックタグ

ヒト

Abstract

尼崎にある総合病院内における在宅医療室で病院から在宅へ移行した 6 ケースで, 半構成的面接調査を行った. 患者の家族ケア・ニーズは時間経過と共に変化し, 退院直前期には, 医療行為や器具への不安, 在宅に帰ってからの生活への不安, 知識不足に対する不安, 構造上の問題, 社会的孤立に対する不安がみられた. 在宅導入期には, 実際のケアを専門家が一緒に行う援助が家族の安心につながり, 在宅安定期には, 慢性期は継続するための, ターミナル期は後悔しない為の精神的援助が重要であった. 在宅における看護とは, 限局的に行われる共同実践であり, 専門家と当事者がともに生活世界構造を構築していく営みであると考えることができた

2002159902

一般病棟における全人的ケアの限界を覚えた一例

Author

古川早苗(香川県立中央病院), 飯間幸代, 池田直美, 木下順子, 朝日俊彦

Source

ホスピスケアと在宅ケア(1341-8688)9巻3号 Page275-278(2001.12)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

インフォームドコンセント; 家族; 癌看護; 在宅介護; 医療従事者-家族関係; 尿管腫瘍(悪性,看護); 病室; ターミナルケア; 患者ケアチーム; 患者心理

医中誌フリーキーワード

家族心理

チェックタグ

ヒト/老年者(65~)/女

Abstract

60歳女.左尿管癌術後の転移に対して,癌の告知から始まって,治療方針等の説明は十分なコンタクトを取りつつ一般病棟で治療を行った.ところが病状の進行に従い,身体的の問題だけでなく,精神的問題,社会的問題,更に霊的問題の存在が明らかとなった.又,夫婦間での疾患に対する認識が異なり,その調整にも苦慮し実際には患者の揺れ動く心境に充分な対応をすることができなかつた.最終的には在宅で家族に見守られて他界することができた.本例を通じて一般病棟における全人的ケアの限界を感じ,医療者間の連携の必要性を痛感させられた

2002158559

一般病棟における終末期のがん患者の家族への援助

Author

藤田あけみ(山形県立保健医療大学 保健医療), 大田直実, 須田利佳子, 佐川美枝子

Source

ホスピスケアと在宅ケア(1341-8688)9巻3号 Page256-264(2001.12)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

インフォームドコンセント; 看護学生; 家族; 癌看護; 患者; 緩和ケア; 直腸腫瘍(悪性,看護); 病室; ターミナルケア; 看護大学院教育

医中誌フリーキーワード

癌患者

チェックタグ

ヒト/中年(45~64)/男

Abstract

緩和ケア病棟不十分のため一般病棟で終末期を迎える癌患者は依然多い。著者らは看護実習を通して、告知されていない癌患者を受け持ち、病状の悪化、痛み、家族間の治療方針の食い違いなどがあり、十分なケアが行われなかったことを経験した。終末期の癌患者の家族への関わり方として、家族の発達段階、役割、機能、病状の受け止め方、悲嘆のプロセス、対処能力を十分アセスメントする必要があると考えられた。又、家族の治療方針を決定する際は正確な情報だけでなく、医療従事者としての判断や分析も提供する必要があると思われた。

2002157012

在宅ターミナルケアに関する研究(その1) 事例にみられる「在宅ターミナルケアの諸相」の分析

Author

能川ケイ(神戸市看護大学 短大), 大野かおり, 西浦郁絵, 森田愛子, 藤原智恵子, 松浦由紀子

Source

神戸市看護大学短期大学部紀要(1342-8209)21号 Page81-90(2002.03)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

ターミナルケア; ホスピスケア; 看護の役割; 在宅医療

医中誌フリーキーワード

在宅死

チェックタグ

ヒト

2002156590

ターミナル後期においても、延命と苦痛緩和の葛藤を認めた、在宅で看取った前立腺がん患者の家族のケアについて

Author

岡田美千子(亀井病院), 柏木英里子, 浜尾巧

Source

ホスピスケアと在宅ケア(1341-8688)9巻3号 Page279-281(2001.12)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

葛藤； インフォームドコンセント； 家族； 地域看護； 緩和ケア； 在宅介護； 前立腺腫瘍(看護, 悪性)； ターミナルケア

医中誌フリーキーワード

苦痛

チェックタグ

ヒト/老年者(65~)/男

Abstract

77 歳男. ターミナル後期の前立腺癌患者で本人の強い希望により在宅ケアに移行した. 始めて経験する家族の死への不安, 薬の副作用や症状変化に対する疑問, 治療への期待と死の受容との葛藤, 介護疲れ等の肉体的・精神的ストレスが感じられ, 医師から患者の状態や今後の起こり得ること等について繰り返しの説明や頻回の看護婦の訪問で対応した. 最終的には頻回に訪問し時間をかけて傾聴・説明するによって, 家族や患者の死を受け入れ, 在宅で見取ることができた

2002155074

ターミナル患者の訪問看護の試み 満足して死ぬために

Author

松原泰子(香川県立中央病院), 植木久美子, 朝日俊彦

Source

ホスピスケアと在宅ケア(1341-8688)9巻3号 Page271-274(2001.12)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

家族； 地域看護； 在宅介護； 腎不全(看護)； ターミナルケア； 面接； 末期患者； 在宅医療

医中誌フリーキーワード

家族心理

チェックタグ

ヒト/老年者(65~)/女

Abstract

80 歳女. 尿路変更として腎瘻を創設され, カテーテルトラブルで頻回に救急外来を訪ねていた. やがて腎機能の悪化に伴い, 腎不全の状態となった. 患者, 家族との相談の結果, 在宅での終末を希望した為, 最後まで自宅で過した. 看護の役割として訪問看護を実施する

だけでなく、遺族となった娘さん夫婦にインタビューすることができたのは大きな収穫であった。尚、ターミナル期における在宅医療の課題は、1) 主治医の認識と地域のかかりつけ医の協力、2) 家族等の協力体制の確保と福祉の介入、3) 積極的な緩和医療の保証、4) 在宅医療における Living Will、5) 開かれた医療と Death Studies、にまとめることができた

2002127291

中山間部における在宅死の現況

Author

早川富博(足助病院(厚生連)), 都筑瑞夫, 池戸昌秋, 長谷川千尋, 坂田稔之, 戸澤英樹, 金澤太茂, 安藤寿代, 林美往, 河合恵美子, 宮治眞

Source

日本農村医学会雑誌(0468-2513)50巻5号 Page683-689(2002.01)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

農村; ターミナルケア

医中誌フリーキーワード

在宅死

チェックタグ

ヒト

Abstract

足助訪問看護ステーション利用者のうち、過去4年間の死亡者107例を対象に、在宅死39例(A群)の背景を病院死68例(B群)と比較検討した。基礎疾患、男女差、病院と自宅の距離に有意差は無かった。A群は、死亡年齢がB群より有意に高く、増加傾向にあり平成12年はB群の比率より高かった。A群は日常生活自立度が低く、主な介護者以外の協力者が多い傾向を認めた。また、在宅か入院かの決定は、A群では本人によるものが69%で、疼痛や呼吸苦の訴えが無い者が有意に多かった。以上より、本人の意志・主な介護者以外の協力者が多いこと・本人から疼痛などの訴えが少ないことなどが、在宅死が可能となる要因と思われた

2002115305

在宅がんターミナル・ケアにおける外科治療の役割 がんの腹部救急病態に対する外科的介入の意義について

Author

合田文則(香川医科大学 総合診療), 臼杵尚志, 前場隆志, 三原崇文, 福永恵, 岡田宏基, 内田善仁, 前田肇, 千田彰一

Source

プライマリ・ケア (0914-8426) 24 巻 3 号 Page184-188 (2001. 09)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

癌看護; 外科手術; 在宅介護; 胆道閉鎖症; 腸閉塞; 尿管閉塞; 腹部腫瘍(悪性, 外科的療法, 看護); ターミナルケア; 救急治療

チェックタグ

ヒト

Abstract

対象は, がん終末期に癌再発, 癌性腹膜炎で腹部救急病態となったイレウス 32 例, 閉塞性黄疸 14 例, 尿管閉塞 20 例であった. イレウスには, 人工肛門造設術が, 胆道閉塞・尿管閉塞には内瘻化ができた症例で在宅療養期間の延長がみられ, QOL の改善に寄与した. 腹部救急病態の発生後に再び在宅治療可能となった症例は, 処置可能な全身状態で, 完全閉塞以前あるいは閉塞後早期に発見され, 有効な外科的治療が行われていた. 進行したがんにおいて在宅療養が可能な期間をなるべく長く確保するために, 腹部救急病態の発生の予測, 早期発見が肝要であり, その意味で在宅ケアを支えるプライマリ・ケア医の果たす役割と責任は大きい

2002086461

在宅療養高齢者の看取り場所の希望と「介護者の満足度」に関連する要因の検討 終末期に向けてのケアマネジメントに関する全国訪問看護ステーション調査から

Author

樋口京子(岐阜大学 看護), 近藤克則, 牧野忠康, 宮田和明, 杉本浩章

Source

厚生 の 指標 (0452-6104) 48 巻 13 号 Page8-15 (2001. 11)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

介護者; 地域看護; 在宅介護; ターミナルケア; ケースマネジメント; 在宅医療; 訪問看護ステーション

チェックタグ

ヒト

Abstract

「介護者の満足度」でターミナルケアの質を評価した場合, 自宅で死亡することは常に質が高いといえるのか, 及びどのようなケアが質を高めるのかを明らかにする為, 介護者の「死の看取り方」の希望やケアマネジメントに着目して, 実際の死亡場所と「介護者の満足

度」に関連する要因を検討した。分析対象は訪問看護を受けた後に死亡した高齢者 1305 名である。高齢で介護力があり、訪問看護者が在宅で看取ることに積極的である場合、在宅高齢者が終末期前後に入院する最大の理由は医学的理由であり、自宅で死亡するとむしろ介護者の満足度が低い場合もみられ、自宅死亡が病院死亡よりも質が高いとは一概にいえなことが示唆された。介護者の満足度は高齢者本人と介護者をアセスメントし、看取り方の希望に基づいてゴールを設定すること、終末期から臨死期の経過を予測し、家族への段階的な死の教育や看取り方の再確認等、ケアマネジメントを丁寧に実施することで高められる可能性がある

2002068233

ストーマ周囲に腹壁転移をきたしたオストメイトの局所管理

Author

祖父江正代(岐阜県立岐阜病院), 谷口雅子, 作間久美

Source

東海ストーマリハビリテーション研究会誌(0289-3320)21巻1号 Page38-41(2001.06)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

癌看護; 地域看護; 在宅介護; 腫瘍転移; 皮膚腫瘍(悪性, 看護, 治療); 腹筋; ターミナルケア; ストーマ(看護); ストーマケア; 創傷被覆材

医中誌フリーキーワード

オストメイト

チェックタグ

ヒト/老年人(65~)/女

Abstract

ストーマ周囲に腹壁転移をきたしたオストメイトに対して、QOL の維持を目的にしたストーマケアを応用した局所管理を行い、その検討を行った。対象は 77 歳の女性で横行結腸癌のためのストーマ造設後、ストーマ尾側腹壁に癌の再発と思われる腫瘍が認められた。腫瘍は徐々に増大し、製品化された装具では該当するサイズのものがなくなり、また癌組織から発生する臭いや疼痛、掻痒感、さらに便のもれの危険が生じたため、ストーマケア技術を応用したパウチング管理の継続が必要となった。袋は最も防臭効果が得られた厚さ 0.04mm のものを使用し、皮膚保護剤にはあらかじめ両面テープを貼りつけ、四分割にしたものを腫瘍周囲 4cm の皮膚に使用した。この方法により臭いと便のもれを生じることなく管理でき、2 日毎の交換が可能となり、ADL を低下することなく終末期を家族とともに過ごすことができた

2002051949

在宅ケアへの移行を実現する要因 ターミナル10事例の検討

Author

鈴木和子(東海大学 健康科), 江川幸二, 谷亀光則, 岩川弘子, 大本和子, 内海美奈子, 佐藤政代, 田中千枝子, 中谷陽明

Source

在宅医療 32号 Page39-43(2001.04)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

アンケート; 介護者; 在宅介護; ターミナルケア; 面接; 末期患者; 在宅医療

チェックタグ

ヒト

Abstract

がんの診断で1998年9月から1999年4月までの間に東海大学病院を退院した患者・家族を対象として、現在の状況について郵送調査を行った。そのうち、現在の患者状態の項目に死亡と記載され、ターミナル患者の在宅ケアを経験した家族を抽出し、事情聴取の上、確認のできた10余名を最終対象として訪問調査を行った。その結果、在宅ケアへの移行を促進するためには、「本人の在宅ケアへの意向」の上に「家族の理解を促す家族支援」も必要であることが分かった。また医療機関としては「本人・家族が抱えている問題を医療従事者が理解すること」や「緊急時や24時間対応の保証」および「往診医や医療機関を紹介すること」などの、在宅ケアへの移行のための体制作りをさらに進めることが重要であることが分かった。

2002039242

学童内科病棟看護婦のターミナルケアに対する意識 在宅ターミナル支援についての看護婦の意識

Author

佐藤信子(神奈川県立こども医療センター), 斎藤理恵子, 中尾陽子, 有田直子

Source

神奈川県立こども医療センター看護研究集録(0913-6657)23巻 Page56-61(1998.03)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

アンケート; 意識; 小児看護; 地域看護; コミュニケーション; ターミナルケア; 家族関係; 在宅医療

チェックタグ

ヒト

2002016537

24 時間在宅ケアにおけるヘルパー単独体制と看護婦・ヘルパー協働体制の比較 協働のあり方とその影響に焦点を当てて

Author

竹内奈緒子(東京大学 医系研究 地域看護), 村嶋幸代, 服部真理子

Source

日本在宅ケア学会誌 4 巻 1 号 Page24-30(2000.12)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

介護者; 看護師; 地域看護; 在宅介護; 医療従事者間人間関係; ターミナルケア; 老人保健医療サービス; 地域保健医療サービス; ホームヘルパー

医中誌フリーキーワード

在宅死

チェックタグ

ヒト/老年者(65~)/男/女

Abstract

24 時間在宅ケアにおけるヘルパー単独体制のステーションと、看護婦・ヘルパー協働体制のステーションの利用者について健康状態や転帰等の特性、24 時間ケアの提供方法、在宅死の状況を比較し、看護職が日中も含め、早朝・準夜・深夜帯に訪問すること、及び看護職とヘルパーが密接に連携していることの意義を検討した。その結果、単独体制では協働体制よりも利用者の自立度が高く、独居が多かった。在宅死亡者の出現率は、両体制に差がなかったが、単独体制では、窒息、急変等、ケアプラン上想定されていない在宅死が多かった。協働体制での場合は全員ターミナルステージでケアプランでも配慮されていた。利用者の変化に迅速に対応し、医療措置、ターミナルケアに対応する為に 24 時間巡回ヘルプでは看護職とヘルパーの密接な連携が必要である

2002015341

終末期まで在宅で療養していた患者の苦痛や介護上の困難に対する看護職・医師・介護職の対応と療養評価

Author

橋本恵美子(産業医科大学 産業保健), 正野逸子, 大田直実

Source

論文種類

原著論文

シソーラス用語

地域看護; 在宅介護; 生活の質; ターミナルケア; 末期患者; 介護支援専門員; 在宅医療; 評価基準

チェックタグ

ヒト/中年(45~64)/高齢者(65~)/男/女

Abstract

作成した調査票と野口・正野のQOL判定表を用いて、家族へは面接調査を行い、ケア提供者に対しては郵送法によりデータを収集した。家族とケア提供者の両方から回答の得られた12事例の有効回答について分析した。その結果、患者の問題としてとりあげた職種が必ずしも問題へ対応しているとは限らず、他の職種が介入していたり協働で対応しており、結果として全体的に問題が解決され、QOLが維持されている。身体症状についての対応は医師だけでなく、同時に訪問看護婦や看護婦が協働で対応することが患者のQOLを高める。利用している社会資源が1年間365日体制で利用できず、また患者の身体症状が強いと、社会資源導入によっても家族の介護技術だけでは困難を解決できないため、結果として患者の日常生活上の問題は解決されずに残る。主介護者についての問題を解決する為には、社会資源をタイムリーに、必要な種類のサービスを、必要な量、提供する為の問題を解決することが必要である

2001281468

老年内科病棟での看取りを考える 遺族アンケート調査より

Author

西沢幸恵(佐久総合病院(厚生連)), 山浦さち江, 市川栄, 井出美代子, 上原晴美, 白田明美, 北原奈津美, 黒岩修子, 宮野昌夫

Source

ホスピスケアと在宅ケア(1341-8688)9巻1号 Page47-50(2001.04)

論文種類

原著論文

シソーラス用語

アンケート; 家族; 老人看護; 死亡; 内科学; 病室; ターミナルケア

チェックタグ

ヒト/高齢者(65~)

Abstract

あたたかい看護ケアを実践するために、前回の調査(平成11年3月)結果を踏まえ、老年